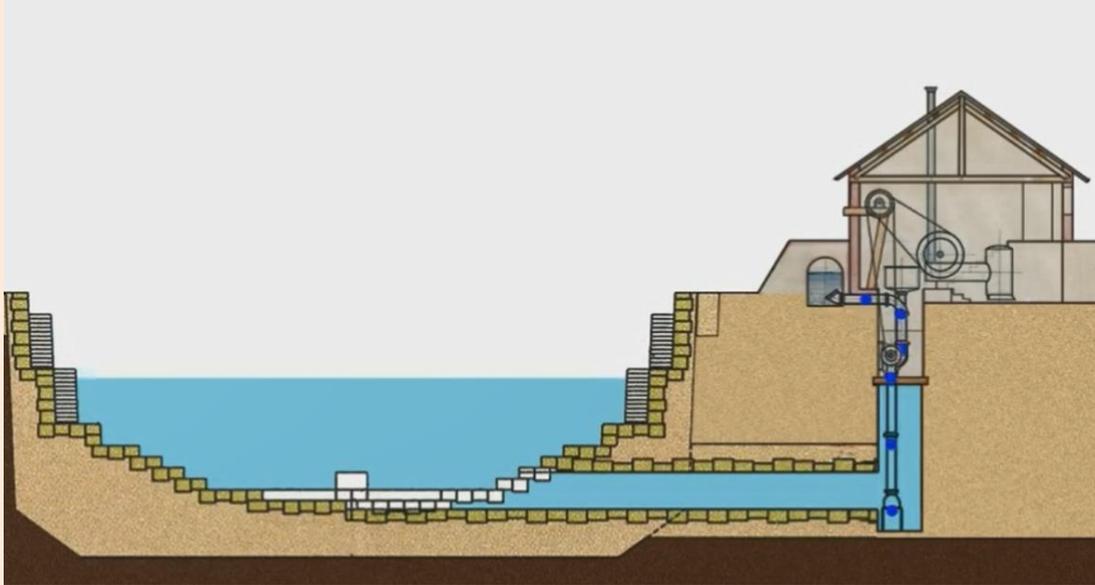


修理基盤としてのドライドック



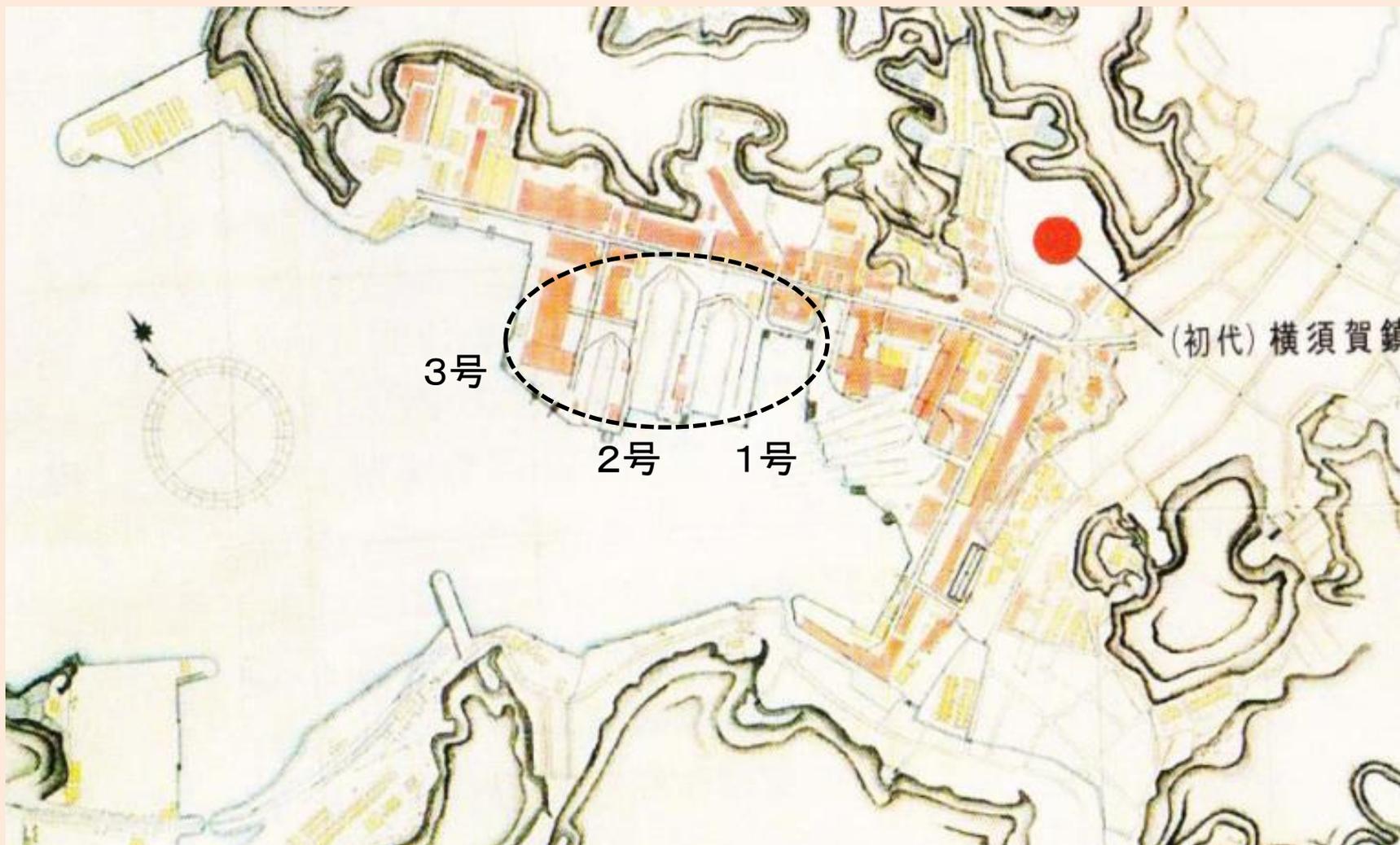
艦がドライドックに入ることを入渠といいますが、入渠するときはドライドックは海水で満たされます。艦が入渠した後門を閉めて海水をポンプで排水します。船は盤木(枕木のようなもの)に着底し、まさにドライになるわけです。

船を造るのは、ドライドックではなく陸上の船台でつくられます。

一方で船の船底には、1年もすると多くの藻や貝殻が付着し、その結果船の速力は遅くなります。少しでも速く走れるように、船をドライドックに入れて、船底を掃除する必要があります。

また、推進器等が故障したときには同様にドライドックに入れて修理をする必要があります。

この様にドライドックは船を最良の状態に維持する上に不可欠な存在なのです。



明治22年ごろの横須賀造船所(1号⇒3号⇒2号ドック)

今も現役で活躍する1号～6号ドック



横須賀造船所時代

1号: 明治4年(1871)

3号: 明治7年(1874)

2号: 明治17年(1884)

日清戦争明治27年

注: 大型の2号が3号の後に造られる

横須賀海軍工廠時代

4号: 明治38年(1905)

日露戦争直後

5号: 大正5年(1916)

第一次世界大戦中

長門・陸奥用

6号: 昭和15年(1940)

大和型(信濃)用

明治11年には艦の修理に潜水服が使用されていた。 今の潜水服の原型と変わりが無い。

明治11年
横須賀製鉄所手引草
(毛利塾提供)



潜水服もゴムを以て製したる衣にして
船橋の底に損傷を生ぜし時この検査(ぎんみ)しまたは
海底(うみそこ)より物を揚げんとする時茲衣を着て水
中に潜入(もぐり)する人は「イ」ある才お筒(ポンプ)に
て空気を送りて呼吸せしむ、